

グローバル人材育成教育学会第5回全国大会

＜テーマ別時間帯順発表一覧及び発表概要＞(ポスター発表、口頭発表、シンポジウム系、講演)

(9月10日(日)分のみ)

＜カリキュラム＞

10:00 - 10:25 <eDC タワー3階「多目的室」><口頭発表>

高城 宏行 (神戸大学)

グローバル人材育成に係る大学教育プログラム開発の動向と課題

＜自然科学教育＞

10:30 - 10:55 <eDC タワー3階「多目的室」><口頭発表>

田中 忠芳 (金沢工業大学)

数物系科学教育のためのグローバルコンテンツ開発

＜明治時代のグローバル人材教育＞

13:50 - 14:25 <eDC タワー3階「プロジェクト講義室」><北海道特別企画講演>

ミシェル・ラフェイ

Global Education in the Non-Global Education Era:

Men of Sapporo Agricultural College

＜大学の国際化＞

13:00 - 13:25 <eDC タワー3階「多目的室」><口頭発表>

大膳 司 (広島大学)

大学における国際化推進に関する研究(2)

－国際化成功認識の構造－

13:00 - 13:45 <eDC タワー3階「プロジェクト講義室」><北海道特別企画講演>

穴田 有一 (北海道情報大学)

人材育成という国際貢献

～小さな大学の挑戦～

＜海外事例＞

14:00-15:00 <eDC タワー3階「自習室」><ポスター発表>

安居 信之 (国際開発センター)

海外での体験学習プログラムにおける協働的活動を通じた学びについて

－関西学院大学「海外フィールドワーク」の事例－

＜理論研究＞

10:00 - 10:25 <eDC タワー3階「プロジェクト講義室」><口頭発表>

鈴木 繁夫 (名古屋大学)

希望理論からみたグローバル人材育成者の育成思想再考

10:00-11:00 <eDC タワー 3 階「自習室」><ポスター発表>
久保 雅義 (新潟医療福祉大学)
健康医療福祉系大学におけるグローバル人材育成教育の課題

<研究者育成>

13:30-13:55<eDC タワー3 階「多目的室」><口頭発表>
三宅 雅人 (奈良先端科学技術大学院大学)
グローバル人材に向けた世界規模で活躍する若手研究者の事例分析と展望

14:30 - 14:55<eDC タワー3 階「多目的室」><口頭発表>
橋田 力 (奈良先端科学技術大学院大学)
海外拠点を活用したグローバル人材育成の可能性
ー 理工系大学院大学に見る国際展開の動向

<語学教育> <留学> <異文化教育>

10:00・10:55 <eDC タワー8 階 プロジェクトルーム><JAGCE 教育実践セミナー>
奥山 則和 (桐蔭学園)、内田富男 (明星大学)
グローバル人材育成のためのアクティブラーニング
～高大連携による探求型学習のススメ～

10:30 - 10:55 <eDC タワー 3 階「プロジェクト講義室」>
斉藤 智 (株式会社桐原書店)
フィリピン語学留学の利点と限界

11:00-12:00 <eDC タワー3 階自習室><ポスター発表>
小野 真嗣 (室蘭工業大学)、大橋 裕子 (RMIT University)
二国間双方向の海外研修を通じた異文化交流プログラムの実践

11:00 - 11:25<eDC タワー 3 階「プロジェクト講義室」><口頭発表>
山崎 秀樹 (北海道千歳高等学校)
世界と日本の食から地域の食を考える
～高校国際科「時事英語」でご当地グルメを世界に PR するプロジェクト

11:00 - 11:25<eDC タワー3 階「多目的室」><口頭発表>
横川 綾子 (明治大学)
オンライン英会話 (国内) とマンツーマン&グループレッスン (海外) のハイブリッド型英語発話力向上プログラム

11:00 - 11:55 <eDC タワー8 階プロジェクトルーム><シンポジウム III>
アーナンダ・クマラ、柳沢秀郎、ロジャース・ジェイムス、ボイス・ニコラス (名城大学)
学部カリキュラムで臨むグローバル人材育成
Capacity Building for Globally-Oriented Human Resource Development

11:30 - 11:55 <eDC タワー3階「プロジェクト講義室」><口頭発表>

赤塚 祐哉（早稲田大学 本庄高等学院）

国際バカロレア（IB）型の英語教育で批判的思考（CT）は育つのか。

11:30 - 11:55<eDC タワー3階「多目的室」><口頭発表>

池田 佳子、エルヴィタ ウィアシー（旧ハフ）（関西大学）

Employability に繋がる短期研修の実践及び研修期間の前・中・後の COIL の活用事例の考察

13:00-14:00 <eDC タワー3階自習室><ポスター発表>

八木 智裕（一般社団法人G l o b a l 8）

コミュニケーションテストOP I c オンサイト実施の振り返りから、次へのつながりを展望する

14:00 - 14:25<eDC タワー3階「多目的室」><口頭発表>

村山 眞理、 岩田 陽子（東京農工大学）

語学力の壁を越える「場」の構築

- 中級者を上級レベルに導く英語コミュニケーション力向上プログラム策定の試み -

14:30 - 14:55 <eDC タワー3階「プロジェクト講義室」><大会会場校特別企画>

ソーラ・サイモン（北海道情報大学）

Enhancing Global Awareness by Students Re-telling Japanese Folk Tales in English Using a CDIO Framework

グローバル人材育成教育学会第5回全国大会発表要旨(ポスター発表)

9月10日(日)

10:00-11:00 掲示板 A 面

久保 雅義(新潟医療福祉大学)

健康医療福祉系大学におけるグローバル人材育成教育の課題

高齢社会の先頭を走る我が国では、健康・医療・福祉分野においてさまざまな先進的な取り組みが試みられており、業種間連携などの蓄積されたノウハウは今後高齢化が予想される国々で日本の専門職者が先導的な役割りを果たしていくための資産として活用が期待される。しかし、健康医療福祉系大学である本学では未だグローバルなキャリア展開サポートに十分注力できていない。在学中は「専門資格取得」に学生の視点がおかれがちで、かつ就業後も臨床・現場での専門領域での研鑽に数年間を費やす必要があるという制約に加え、さらに大学からのグローバルなキャリア展開に必要な情報の量が十分でなく、学生のキャリアパス全体を支えられるような内容になっていないことが学生の動機づけに対する足かせとなっていると考えている。グローバル人材育成教育の先行機関との議論を通じて、健康・医療・福祉分野でのグローバル人材育成への道筋を考えたい。

11:00-12:00 掲示板 B 面

小野 真嗣(室蘭工業大学)、大橋 裕子 (RMIT University)

「二国間双方向の海外研修を通じた異文化交流プログラムの実践」

本発表は日豪両国に位置する大学間で相互に派遣・受入を行っている海外研修の一事例として、発表者の勤務校である室蘭工業大学(以下、本学)とその協定校である RMIT University との異文化交流事業を取り上げ報告するものである。本学は北海道内の理工系単科の国立大学であるものの、本事業は工学の専門性には特化せず、語学にも触れつつも、人間性や人格形成に影響を与える人的交流に主たる目的を位置付けたものである。TOEIC等の資格試験奨励が進み、語学研修として一方向の派遣プログラムが多い中、この双方向交流事業の意義についての考察を述べることにしたい。

13:00-14:00 掲示板 A 面

八木 智裕(一般社団法人Global8)

コミュニケーションテストOPIcオンサイト実施の振り返りから、次へのつながりを展望する

前職のNECにおいてグローバル人材育成・選抜を考える際、英語スキルの中でも即時対応の要素が強いスピーキングにおいて、スキルはもとよりそのスキルに起因すると思われるコミュニケーションに対する積極性に課題意識を覚えた。そこで、数あるスピーキングテストの中でも(海外においてではあるが)豊富な実績があり、従来に無いAdaptiveな形式のテストとして英語スピーキングテストOPIcを現状把握・育成効果測定に向け採用した。その結果として、当学会とも2014年賛助会員として入会以来様々な形で「つながり」を模索し、OPIc活用の実態や効果の可視化も紹介されてきた。学習者自身のコミュニケーションスキルの現状認識と、自らの将来計画を見据え、それに必要とされる目標設定を行うことの意義を、ここ3年の振り返りを踏まえ、次への「つながり」を展望する形で考察を試みたい。

14:00-15:00 掲示板 B 面

安居 信之（国際開発センター）

海外での体験学習プログラムにおける協働的活動を通じた学びについて

－関西学院大学「海外フィールドワーク」の事例－

グローバル人材育成の一環として、各々の大学においては創意工夫の中、短期や中期にわたって、それぞれに特色ある海外での体験学習プログラムが多数実施されている。スーパーグローバル大学に採択されている関西学院大学でも、国際教育・協力センターのもとで、卒業単位に含まれる正規の授業科目として同様のプログラムが複数運営されている。ここではそのひとつである「海外フィールドワーク」を取り上げ、実践の中から得られた具体的な証左を通じて、海外における体験学習の有効性について検証を試みたい。特に、①「参加学生間の協働による学び」及び、②「現地大学生との異文化間協働による学び」の2つの視点から考察する。さらにそこから、留学、海外スタディツアー/フィールドワーク、海外インターンシップ等の企画運営に資する知見を引き出せればとも考えている。

グローバル人材育成教育学会第5回全国大会発表要旨(口頭発表)

9月10日(日)

<eDC タワー3階「プロジェクト講義室」>

10:00 - 10:25 <eDC タワー3階「プロジェクト講義室」>

鈴木 繁夫(名古屋大学)

希望理論からみたグローバル人材育成者の育成思想再考

グローバル人材育成にあたり育成者は、従来からの3つの目標(コミュニケーション能力向上・チャレンジ精神醸成・異文化理解度増進)を達成すべく、育成者自らの教育能力を信じて、プログラムを策定・実施し、その成果を測定している。この一連の活動はポジティブ心理学の希望理論でいう、目標行動→効能/道筋思考→結果価値という希望過程にあたる。しかし現在の状況は、新自由主義グローバル化が掲げる等価交換・優勝劣敗・格差肯定に警鐘を鳴らす、自国第一主義やローカルな共生という政治・社会運動が台頭している。そのため、育成者による希望過程の無反省な反復は、人材育成の擬態を実践することになる。育成者として、対価に依拠しない教育指導への喜び(感情)、挫折を前提とした希望授与によるやりがい感の醸成(意義)、格差是正を実現しようとする志(道徳)[希望過程の鼎]に照準を合わせ育成の思想を練り直し、希望過程を辿る必要がある。

10:30 - 10:55 <eDC タワー3階「プロジェクト講義室」>

斉藤 智(株式会社桐原書店)

フィリピン語学留学の利点と限界

2010年頃から急速に増え始めたフィリピン国内の日本人留学生の数は、2015年度に30,000人を超え、2017年度には50,000人を突破すると予測されている。その大半は、セブ島にある民間の語学学校で短期・中期の英語集中講座を受講していると推測される。フィリピンは世界で4番目に英語話者の人口が多い国といわれ、その高い英語力と比較的安価な人件費に注目し、多くの欧米の企業がコールセンターをフィリピンに構えている。現在、日本人留学生の多くは社会人だが、大学生、高校生、さらに親子の留学生も増えつつある。なぜ日本人英語学習者は、欧米やオセアニアといった英語圏ではなく、フィリピン、特にセブ島を留学先に選ぶのか、実際にどのような授業がどういった資格をもった講師によって行われているのか、費用はどれくらいかかるのか、また、欧米に比べてどのようなデメリットがあるのかなどを、株式会社桐原書店が昨年買収したセブ島の語学学校FEAを例に紹介する。

11:00 - 11:25 <eDC タワー3階「プロジェクト講義室」>

山崎 秀樹(北海道千歳高等学校)

世界と日本の食から地域の食を考える～高校国際科「時事英語」でご当地グルメを世界にPRするプロジェクト

北海道千歳高等学校国際教養科「時事英語」の授業では「グローバルな視点で物事を見る」学習として、TED、BBC、Washington Post, Japan Times等のメディアで、ハラルフードや和食、日本の給食制度、Jamie Oliverの活動等「世界の食と健康」について理解を深め、「ローカルにどう貢献するか」を考え地域と協働する「千歳バーガープロジェクト」を実施した。学んだ外国語や異文化を千歳の産官学協働による地域観光活性化に生かすべく活動している。取材内容を元に英語や中国語、韓国語によるメニューやレビュー、広告やPRビデオを作成し、Instagram, Weibo, Facebook, Twitter, Trip Advisor, Naver等で来道観光客にPRした。その結果、外国語で責任をもって発信する方法や、広告デザイン、観光客のニーズ分析などマーケティングについても学んだ。卒業後の進路希望が、国際系のみならず地域開発や観光学、国際経営学など多岐に広がるなどキャリア教育的効果も顕著に出ている。

11:30 - 11:55 <eDC タワー3階「プロジェクト講義室」>
赤塚 祐哉(早稲田大学 本庄高等学院)
国際バカロレア(IB)型の英語教育で批判的思考(CT)は育つのか。

グローバル人材の育成にあたり、近年、批判的思考(以下、CTとする。)が注目されている。とりわけグローバル人材育成に資するとされる国際バカロレア(以下、IBとする。)の教育プログラムはCTを育むとされており、その教育効果への期待も大きい。そこで本研究では、IBの外国語科目である「言語B(英語)」の教育手法を参考とした英語授業を受けた高校生に、CTの高まりがみられるのかについて調査・分析した。授業では高次の思考スキル(HOTs)に該当する質問を継続的に投げかけた。分析にあたり「クリティカルシンキング志向性尺度」(宮本,1996)や自由記述による質問紙を用いて高校生がどのような実感をもっているのかを測定した。本発表では、研究の中間報告として、日本の一般の高校生がCTを身につけるためにはどのくらいの分量の質問文を投げかける必要があるのか、どのくらいの期間の指導が必要なのか、といった課題について報告する。

14:30 - 14:55 <eDC タワー3階「プロジェクト講義室」><大会会場校特別企画>
ソーラ・サイモン(北海道情報大学)
Enhancing Global Awareness by Students Re-telling Japanese Folk Tales in English Using a CDIO Framework

<eDC タワー3 階「多目的室」>

10:00 - 10:25<eDC タワー3 階「多目的室」>
高城 宏行(神戸大学)
グローバル人材育成に係る大学教育プログラム開発の動向と課題

グローバル人材の育成に向けた多種多様な教育プログラムが日本で展開されている。この発表では、大学教育におけるグローバル人材育成に係るプログラム開発の動向を、教育の国際化のアプローチ(Competition-typeとCooperation-type)とカリキュラムモデル(Product ModelとProcess Model)を組み合わせ構築したカリキュラムの国際化の類型を用いて考察する。Competitive-Product型(主にグローバル経済において国際競争力を持つ人材に必要な専門知識やスキルを教員主導で修得させるもの)からの移行と近年発展が見られるCooperative-Process型(内発的に動機づけられた学習者中心の国際交流・経験を通しグローバル社会の一員となるための異文化コンピテンスの修得を助長するもの)について事例を挙げて説明する。更にグローバル人材育成に向けた今後のプログラム開発の課題を提示する。

10:30 - 10:55<eDC タワー3 階「多目的室」>
田中 忠芳(金沢工業大学)
数物系科学教育のためのグローバルコンテンツ開発

数学および物理学に関連した科学教育のためのグローバルコンテンツの開発について報告する。

11:00 - 11:25<eDC タワー3 階「多目的室」>

横川 綾子(明治大学)

オンライン英会話(国内)とマンツーマン&グループレッスン(海外)のハイブリッド型英語発話力向上プログラム

本発表では、明治大学国際教育センターが10名の参加者に対して試験的に実施する「英語発話力向上モニタープログラム」の概要を述べ、想定される教育効果を考察する。発表者は本プログラムの開発担当者であり、来年度以降は、オンライン英会話(国内)とマンツーマンおよびグループ形式のスピーキングレッスン(海外)を連携させたハイブリッド型語学研修の正式実施を目指している。プログラムの特徴に、研修開始前と終了後にTOEIC®スピーキングテストを実施することより、参加者の発話力とその伸びを客観的数値で評価し、教育効果を測る点がある。また、海外研修先はセブ島の語学学校等ではなくマニラ中心地を拠点とする大学付属の語学研修センターである点も、大学による語学研修のオプションとして新規性があると思われる。本発表では、開発から実施に至るまでの経緯、現地視察の様子、参加者のコメント等からプログラムの狙いを明らかにする。

11:30 - 11:55<eDC タワー3 階「多目的室」>

池田 佳子、エルヴィタ ウィアシー(旧ハフ)(関西大学)

Employability に繋がる短期研修の実践及び研修期間の前・中・後のCOILの活用事例の考察

本発表では、チーム力、前に踏み出す実行力、そして主体的な課題発見といった力を異文化接触の中で涵養することを主旨とした「短期トライアングル研修」の実践と、その短期である不利点をカバーし共修の効果を高める実際の留学・研修期間の前・中・後のCOIL(オンライン交流学习)の活用事例について共有する。台湾・日本・タイ王国の3か国の協定大学がチームとなり、PBLの共修活動デザインをこのトライアングル研修に盛り込んだ。またPBLの活動のファシリテーションを連携して行うことで、それぞれアジア太平洋に離れて位置する3か国の学生達は研修期間に限ることなく、常に共に学び接触する経験をする事ができた。昨今の留学期間の短期化傾向とは裏腹に、その期間中に求める成長は就職可能性に直接つながるものが求められている。一見矛盾しているかのような欲張りな需要に対し、本事例は一つの解決を探る手がかりとなるかもしれない。

13:00 - 13:25<eDC タワー3 階「多目的室」>

大膳 司(広島大学)

大学における国際化推進に関する研究(2)ー国際化成功認識の構造ー

2017年3月、日本の学士課程教育を実施している744校の国際化担当副学長宛に、調査票『大学における国際化推進の実態と課題に関する調査』を送り、日本の大学における国際化推進に状況、すなわち、国際化に関わる理念をどのように抱いているか、自身の経営の中に国際化をどのように位置づけているか、国際化に関わるどのような活動を実施しているか、等を調査した(回答175校・23.5%)。この度は、この調査の中で、「貴校における国際化は全般的にうまくいっているか」との質問への回答結果を用いて、国際化成功認識の構造を明らかにした。その結果、「国際化活動を総合的に重視している」「教員・学生の国際化を目標としている」「外国人学生を積極的に受け入れている」大学が、自校の国際化が全般的にうまくいっている、と回答していた。詳細は、当日資料を配って報告したい。

13:30-13:55<eDC タワー3 階「多目的室」>

三宅 雅人(奈良先端科学技術大学院大学)

グローバル人材に向けた世界規模で活躍する若手研究者の事例分析と展望

研究者のグローバル化は、国境のみならず様々な境界を破壊し、情報化がそれに拍車を掛けている。その中でも、知とプロフェッショナルは、超高速で世界を循環している。もともと研究者のグローバル化には、教育・研究と密接な関係があり、教育研究体制の国際連係は、世界の未来社会における課題解決の必須条件である。本学では、若手研究者を長期的(1年)に海外派遣させている。このプロジェクトでは、研究力向上および知の国際ネットワーク形成を目指し、派遣先について、指導教員、派遣する本人を交えた事前調整を入念に実施している。さらに帰国後においても、学長・理事をはじめ、学生まで参加する公式成果報告会の実施など、定期的に経過検証を行いつつ、フォローアップを図っている。本発表では、国際性、多様性、融合性、先進性の涵養こそ、研究者のグローバル化には必要であると考え、具体的な事例を紹介しながら、検証、考察を報告する予定である。

14:00 - 14:25<eDC タワー3 階「多目的室」>

村山 眞理、岩田 陽子(東京農工大学)

語学力の壁を越える「場」の構築

-中級者を上級レベルに導く英語コミュニケーション力向上プログラム策定の試み-

東京農工大学では、理工系グローバル人材育成を目的とした「グローバル・プロフェッショナル・プログラム」を H28 年度から開始した。グローバルリーダーの育成において英語力の向上は欠かせない課題であり、テストスコア (TOEIC など) 相当の運用力 (スピーキング) がないことが本学学生の問題点である。日本人以外の英語話者と対等な議論や折衝ができるレベルの英語コミュニケーション力醸成を目指して「語学の壁を越える場」の設計を試みた。具体的には、「思考構築プログラム」、「英語化演習」、「海外連携ワークショップ」という 3 つの「場」を通して徐々に積み上げることにより、スコアと運用力のギャップを埋め、「主張する」ことへの自信および動機付けを高め、臆することなく英語話者と対峙するマインドセットを育む。本発表では、H28 年度のプログラム概要とその成果について報告する。

14:30 - 14:55<eDC タワー3 階「多目的室」>

橋田 力(奈良先端科学技術大学院大学)

海外拠点を活用したグローバル人材育成の可能性 — 理工系大学院大学に見る国際展開の動向

世界的な頭脳循環が加速する中、科学技術の発展を担う理工系グローバル人材の育成は、日本の大学にとって重要な課題となっている。本学では、スーパーグローバル大学創成支援事業の一環として、2016年4月にインドネシアオフィス、2017年3月にタイオフィスを開設し、多数の留学生の母国となっている東南アジア諸国における教育研究面での国際連携を推進する基盤を固めた。学生が約1200名、教員が約230名と小規模な理工系大学院大学にとって、海外展開で先行した大規模校のように潤沢なリソースを投入することは難しく、現地同窓会や海外協定校との緊密な協力によって比較的小さなリソースで海外オフィスを実現することができた。本発表では、後発の小規模校がさまざまな試行錯誤と工夫を重ねて海外オフィスを設置した軌跡を振り返り、海外拠点を活用した理工系グローバル人材育成の可能性について考えたい。

グローバル人材育成教育学会第5回全国大会発表要旨(シンポジウム系)

9月10日(日)

JAGCE 教育実践セミナー

10:00 - 10:25

奥山 則和(桐蔭学園)、内田 富男(明星大学)

グローバル人材育成のためのアクティブ・ラーニング

～ 高大連携による探求型学習のススメ ～

実践を重視するグローバル人材育成教育学会 (The Japan Association for Global Competency Education, JAGCE) では、専門部会「教育連携部会」において高大連携による先導的教育実践の試みを行っています。このセミナーでは昨年度から実施している高校生と大学生の協働による探求型学習プロジェクトをご紹介します。

同プロジェクトは、生徒・学生、教師が高大の垣根を越え、グローバルな時代に求められる力(Global Competency)を養成するという目標に向かって学び合う機会を共有するアクティブ・ラーニングの実践です。これまで延べ 11 高校 (国立付属高校・私立高校)、6 大学の学生と各高校、大学に所属する教員、JAGCE の賛助会員有志が参加しています。昨年度は関東支部大会の統一テーマ『グローバルな時代に輝く女性たち』を受け、「グローバルに活躍する女性」を課題とし、本年度は 2020 年を見越して、「グローバリズム・ローカリズムの視点から見る日本：次世代が考える居心地の良い Greater Tokyo」というテーマで行い、東京、神奈川の 7 校からの高校生の参加があり、プロジェクトは飛躍的に拡大しています。

この教育実践セミナーでは、実際に本年度のプロジェクトで使用した「グローバル人材育成に特化した探求型学習のためのルーブリック」等を使って、ハンズオン形式を交えながら教育連携部会企画メンバーの知見と経験を活かした高大教員の協働によるプロジェクトのノウハウとその成果等を具体的にご紹介します。

シンポジウム III

11:00 - 11:55 <eDC タワー8 階プロジェクトルーム>

司会・シンポジスト

アーナンダ・クマール(名城大学)

シンポジスト

柳沢秀郎、ロジャース・ジェイムス、ボイス・ニコラス(名城大学)

学部カリキュラムで臨むグローバル人材育成

Capacity Building for Globally-Oriented Human Resource Development

グローバル化が急速に進んでいる中、日本では人材のグローバル化対応が急務とされている。にもかかわらず、他国と比較しても、日本の若者たちの海外留学に対する抵抗感や海外への関心の低さは無視できない問題である。また、英語を中心とする外国語の運用能力の問題も日本人にとって大きな悩みである。英語教師と学習者による長年のトレーニングにもかかわらず、なぜ期待した程度に英語運用能力が高まっていないのかという問題は現在も我々の悩みの種であり続けている。

一方で、いわゆる「文系大学生」の学習に関する様々な問題も、関係者にとって頭を悩ます重要な課題となっている。例えば、「英語をマスターしたい」という漠然とした願望がありながら、学生の多くがそれを実際にどう仕事や社会活動に役立てるのかという具体的で明確なビジョンが描けず、結果、学習のモチベーションを維持できない場合が少なくない。こういった課題に関する解決策については大学関係者も様々な実験を行っている最中である。将来の職場および取引先の相手が同じ国民(日本人)なのか外国人なのかにかかわらず、日本の若者がグローバル人材としての競争力を持って国内外で活躍できるようにするために、こうした課題は早期に解決される必要がある。

当シンポジウムでは、2016年に設立された名城大学外国語学部の取り組みについて様々な視点から紹介をしたい。大小規模の講義室における学習意欲向上のための具体的な取り組みや、英語運用能力を高めるための手法、そしてグローバル人材として必須とされている ICT の運用能力を高める教育など、様々な側面から議論を行う予定である。

教育連携部会企画

13:00 - 14:25 <eDC タワー8 階プロジェクトルーム>

次期学習指導要領が中等教育と大学に与える影響

－国際バカロレア(IB)とイングランドのカリキュラムとの関連性－

モデレーター

勝又 美智雄(国際教養大学名誉教授)

登壇者

赤塚 祐哉(早稲田大学本庄高等学院教諭、日本国際バカロレア教育学会理事)

奥山 則和(桐蔭学園グローバル教育センター長、イングランド教員免許保持者)

斉藤 智(株式会社桐原書店代表取締役社長、検定教科書発行者)

現行の学習指導要領は知識・技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視している。しかし、この趣旨を踏まえた教育が現場では実践されていないとの批判がある。こうした現状を踏まえ、次期学習指導要領では、一歩踏み込んで「主体的・対話的で深い学び」を目玉としている。「主体的・対話的で深い学び」という考え方は、既にイングランドではナショナル・カリキュラムの下で 20 年近く実施されている。その特徴は、「学習すべき内容(programme of study)」及び「到達目標(attainment target)」をカバーしたうえで「教科横断型の重要な諸能力(key skills)」を伸ばすことであるが、その評価については活発に議論されている。また、批判的思考力の育成を目標とする国際バカロレア (IB) のカリキュラムは、世界標準のカリキュラムとして認知され、探究型、課題解決型の学習方法を特徴としている。IB の教育理念・教育手法の一部は次期学習指導要領において参考にされている。いずれのカリキュラムも「主体的・対話的で深い学び」を特徴としているが、本シンポジウムでは、この2つの外国のカリキュラムについて、日本の学習指導要領や検定教科書との関連性について述べ、中等教育に与える影響について議論し、さらに「主体的・対話的で深い学び」を身につけた高校生3年生を日本の大学がどのように受け入れるのかをフロアーを交えて考えたい。